HANDS next【ハンズネクスト】
とちぎ多文化共生教育通信
発行:宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDSプロジェクト部門
News Letter "HANDS next"
vol 23

外国人児童生徒教育推進協議会報告

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
センター長（HANDS 部門代表）
田巻　松雄

外国人児童生徒教育協議会は、今年度、9月7日と1月16日に2回開催した。いつもの同じメニューは、参加者による現場報告と情報・意見交換である。数値的なことも含めた整理はまだしていないが、「日本語が全く分からない子が突然入学してきて大変な対応に追われている・・」という趣旨の発言が何人かから発せられたのが印象に残っている。現場で何が起きているのか、引き続き注視していきたい。

1回目では、今年度年度計画、外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣状況、昨年3-4月に実施した第7回目の進路状況調査結果（栃木県内のすべての公立中学校卒業生を対象にした調査）を報告するとともに、栃木ケーブルテレビ番組「栃木市における多言語による高校進学ガイダンス」（2016年10月1日）と真岡市いちごテレビ番組「真岡市 AMAUTA 夏期集団学習支援」（2014年度）を放映した。そして、国際学部4年生のオルティスゆみこが学生ボランティア派遣体験談を発表した。学生が協議会の場で体験談を発表するのは初めてのことと思う。彼女は栃木市の中学校に通うペルー人女子生徒を3年間続けて支援してきた学生である。1人の生徒を3年間支援してきた例はないと思う。その学生は昨年度私立の高校に進学することが出来た。体験談では3年間の様々な思い出が語られたが、自分にとって印象的だったのは、支援を始めた当初、「勉強を教える」という気持ちで向き合ってきた自分のやり方が失敗だったと語ったことである。それよりも大事なことは、まずは、外国人でも頑張れば道が拓けることを伝え、勉強や進学に対するモチベーションをあげることが重要であることを理解するようになり。それを意識してロールモデル的な役割を果たしながら支援に臨んだことが、いろいろな課題はあったにせよ、高校進学を可能にした要因としては大きかったと思うと。目標を発見し、自信をつけさせる支援の重要性を改めて教えらえた気がした。

2回目では、横浜の公立修悠館高等学校の井上恭宏さんに話をしていただいた。修悠館は2つの通信制高校が併設された通信制独立高校である。2008年（平成20年）4月に開校した。普通科で、単年度募集人数は1250人である。単位制のため学年はなく、新入生から卒業間近の生徒まで、さまざまな学習状況の生徒が36学級に在籍して学習している。2017年度（平成29年度）5月現在の在籍数は2210名である。2017年度（平成29年度）の外国につながる生徒の在籍数は153名で、フィリピンにつながる生徒が45名、中国につながる生徒が11名、ブラジルやペルー、ボリビアなどラテン・アメリカにつながる生徒が46名、その他となっている。本校で長らく外国人生徒指導に関わってきた井上さんの

お話から、通信制高校の果たしている役割や可能性、課題など多くのことを学んだ。

昨年８月関西の大学で井上さんの発表を聞く機会があり、通信制高校の現実に衝撃を受けるとともに、外国人生徒が学ぶ場としての定時制や通信制高校にあまり関心を向けてこなかったことを痛感させられた。外国人生徒が定時制高校や通信制高校を進路先に選ぶ理由としては、入りやすさに加えて、年齢・生活環境・国籍等が多様な生徒が在籍しており、全日制高校のような学力主義･集団行動･画一的雰囲気が少なく、「学びやすい」学校文化や環境が存在することが大きく関係しよう。そして、外国人生徒を受け入れ積極的にサポートをする定時制通信制高校が拡大してきたことがある。栃木県でも、定時制課程と通信制課程のある併設校である公立の学悠館高等学校が 2005 年（平成 17 年）に設立されている。定時制課程では在籍数 568 名（2017 年７月１日現在）のうち 22 名が外国籍の生徒（Ⅰ部７名、Ⅱ部７名、Ⅲ部８名）となっており、母語の内訳は、スペイン語が９名、タガログ語が８名、ポルトガル語３名、ウルドゥー語が２名、中国語が２名となっている。一方通信制課程では、外国につながる生徒の在籍は８名で、そのうち日本語の支援が必要な生徒はパキスタンにつながる生徒が３名、ブラジルにつながる生徒が２名の計５名である。今年度初めて本校の通信制で学ぶ外国人生徒の学生ボランティア派遣を行った。

レポート、スクーリング（面接指導）、試験という３段階の学習によって単位を取得していく通信制の教育は、文字コミュニケーションを主体とするもので、レポートを日本語で作成することが外国人生徒にとっては高いハードルとなると言われてきたが、通信制で学ぶ外国人生徒は相当数いるのではないか。ちなみに、文科省の最新の数字では、日本語指導を必要とする全国の高校生の課程別の生徒数を示しておくと、総数 3,545,027 人、全日制 3,243,422（91.5%）人、定時制 112,187（3.2%）人、通信制 189,418（5.3%）人である。通信制に通う生徒は 20 人に１人である（2014 年度データ）。定時制や通信制が外国人生徒の学ぶ場として担っている社会的役割についてもう少ししっかり見ていきたいと感じた協議会であった。

上記に触れたが、今年度の事業で今までになかったものは、高校への学ボラ派遣を実施したことである。高校進学後に特別な支援を要する生徒にどのように向き合っていくのか、これもまた大きな課題である。

「多言語による高校進学ガイダンス」 開催報告

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター　船山千恵

10 月 29 日（日）14 時から、本学大学会館において「多言語による高校進学ガイダンス」を開催しました。2010 年より毎年開催し、今回で８度目の開催です。このガイダンスは、日本語を母語としない子どもたちやその保護者を対象にして、日本の教育制度や高校受検に関する情報を正確に提供することを目的に開催するものです。

内容は例年どおり、「言語別テーブルごとのガイダンス」、「全体質疑応答」、「体験談発表」でした。台風の影響が心配されたため、今回は、最後の「アンケート」は省略しました。

第１部では、日本語を含む９か国語の資料を用意し、通訳を介して説明しました。親切で丁寧な説明をしてくれる通訳者、その説明に真剣に耳を傾ける外国人児童生徒の保護者、この場に参加者生徒を一緒に連れてきてくれた支援者、